慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代ドイツ社会学の思考状況に関するノート:その人間中心主義的志向をめぐつて
Sub Title	A note on the "Speculative-Constellation" of German sociology of today
Author	石坂, 巌
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.9 (1955. 9) ,p.686(36)- 696(46)
JaLC DOI	10.14991/001.19550901-0036
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550901-0036

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代ドイツ社會學の思考狀況に關するノート

その人間中心主義的志向をめぐつて―

石

9—14. 9—14.

五、社會學的人格概念 三、記識批判としてのイデオロギニ、ウエーバーとディルタイニ、ウエーバーとディルタイニ、ウエーバーとディルタイニ、中で、「人間學的社會學會議」

くつかの論文により構成されている。それ故ドイツ社會學の職後の「ドイツ社會學の精神史的狀況」の研究のために讀み集められたいfür Soziologie」を入手し得なかつたが故に ひとまず 斷念 されたイツ社會學界を精力的に主導しつつある雜誌「Kölner Zeitschrift本稿は元來、第二次大職の「恐るべき崩壞」(L. v. Wiese)後のド

向ここにいうドイツ社會學とはいわゆる西獨のそれであること、における現代のそれの位置、意義を考察する意圖に代つて、方法、いるノートの提供も許されるであろう。 対象、課題に對する彼らの態度の特徴を窺い且つそのりんかくを描 對象、課題に對する彼らの態度の特徴を窺い且つそのりんかくを描 数のである。 一下イツ社會學紹介の殆ど皆無なることを思えばか かるノートの提供も許されるであろう。

ることを附記しておく。と、紙面の節約のため末尾に一括列記することにより代えられていき、紙面の節約のため末尾に一括列記することは煩難に耐えぬこと参考論文の本文中での引用を一々指示することは煩難に耐えぬこと、尚ここにいうドイツ社會學とはいわゆる西獨のそれであること、

、「人間學的社會學會議」

人間こそこの世の意味である(L. v. Wiese, 閉會の言葉)

この壆會は開かれた。「人間についての關連諸科學促進のための會月二十七、八日 Mainz 大學において ビ・v. Wiese 議長の下に現代ドイツ社會學の問題狀況を象徴するかのように一九四九年九

第一に人間人格の集團的實存としての社會形成體との關連において 専門學問の代表者により行われた報告を詳述することはできぬが、心理學、精神病理學、經濟學、法律學、人種學、教育學、神學の九 問題意識の具象化であつた。今このテーマをめぐつて社會學、哲學、 Bevölkerungsvermehrung des 19. Jahrhunderts.) な彼のの und Kollektivium)、②「十九世紀の巨大な人口增加の社會的、文 この多彩な顔ぶれにもまして會議のテーマ(1)「人格と集團」(Person ある一部門の學者が絕對多數を占めたとはいえなかつた。出席者の 腰を下ろした。とりわけ經濟學者と社會學者が多かつたとはいえ、 哲學者と、 議」という長たらしい副題をもつたこの會議の席上には人種學者が 科學に向けて布告されたのである。 識」という綜合的課題に仕えるべきことが、とりわけドイツ社會諸 視角からの人口増大の人間=その能力、資質、知性=への影響の檢 化的歸結 (Die sozialen und kulturellen Folgen der großen 人間の研究を各専門褪角からとりあげること、第二に同様に各専門 即ち じ 社會學者と神學者とが肩を並べ法學者の隣に心理學者が v. Wiese の開會の言葉でいえば「入間なるものの認

Wiese の關係理論の基礎附けを行つたのに呼應して、同論文集中に集中で Harriet Hoffmann が社會科學的研究方法としてのL. v. Wiese 生誕七十五年紀念論文極的な意慾と關心の所在を示すものであろう。このような意慾が又極的な意慾と關心の所在を示すものであろう。このような意慾が又極的な意慾と関心の所在を示すものであろう。このような意慾が又極的な意慾と関心の所在を示すものであろう。このような意慾が又極的な意慾と関心を表現して、同論文集中に表現の表別の表演としてのに呼應して、同論文集中に表現の表別の表演としてのに呼應して、同論文集中に集中で、Wiese により提唱されている。

定の明示を要求し之を決定せしめた。 論の獨立化を阻害したこと(例えば第一、第二回社會學大會(一九一 並びに社會政策を含めての應用社會學の諸問題に專心する」べき規 その程度の測定に終始し内容の問題が置き去られたこと)、又現代ド 跡づけた。L. v. Wiese 自身ドイツ社會學會の再建に際し、Max 程」=態度と狀況の産物=概念の影響、意義を夫々の分野に亙つて 彼ら自身の思推塗行の廣汎な深化に新な衝撃を受け、新しい認識の であることから最早そのプログラムは「古くさく」みえ維持しがた イツ民族のもつ大きな窮迫に較べればより幸福な時代における産物 かり立てられ、個人的關心からその內容がいかほどに自由であるか 〇年、一二年)では議論は論者が現實上、推定上抱く規範への追求に への限定)が秘教的に把握された科學性のあまりの强調の故に純理 Weber 時代の古いプログラム(價值判斷排除の要求、客觀的認識 ための路を知つたという限りで大きな影響を受けたことを主張し、 を提供したことをその功績として稱え、他の社會諸科學が之により 且つ全體的觀照を提供することにより社會生活の理論に方法的基礎 おいて體系的社會學(關係理論を指す) 教育學、 新たなドイツ社會學會の規約第一章に「學會は理論社會學 經營社會政策へ及ぼした關係理論の基本範疇たる「社會過 社會政策、 社會倫理學、別して社會心理學、 が自身の問題領域を確定し 經營

れているか、若干の論點について以下このことを考察してみたい。「意慾」が彼ら自身營む社會學の學問的活動においていかに展開さ心主義的志向と積極的な意慾を示したが、ではかかる「まなざし」、以上やや外面的な諸事情の一瞥により現代ドイツ社會學の人間中以上やや外面的な諸事情の一瞥により現代ドイツ社會學の人間中

現代ドイツ社會學の思考狀況に關するノー

「行為の背後に人間が立つ」人間が残る」……Dilthey「抽象的、實體的本質のある とデ タイ あの ?」.....M. 灰色の亡靈が追拂わ Weber れ

Stein, し内側から作用する精神的諸動機を、その結果との關連において理開」とをその對象としてもち、「同時にだが又人間の生活遂行を規定 Wanstrat が確認し たその 傳統とは「社會の外面的組織や計畫でその「傳統」を現代社會學的思考の基礎として確認しつつあつた。 Methode はなく社會的態度と行動のうちに現わされるものすべての發展と展 以前に Renate Wanstrat がその論文「Die hermeneutische 傳統であるかを顧みることを要求したのである。然し彼が「アメリ ことなく個人的研究活動を押し進めることを强調し、 なき研究者としてとどまるべきであり、集團的活動に脅やかされる 故に事實の蒐集が强調されたが、現在ではアメリカのやり方によつ 會並びに第三囘人間學的社會學會議の席上のべられた L.v. Wiese・ウェーバーの町 Heidelberg に開かれた第十二囘ドイツ社會學大 カ的やり方」の前での祖國の社會學的傳統の忘却を懸念するかなり して自立的理念の價値を高く保持し概念的なるものを無視することStein, A. Schöffel による自己の傳統を忘るべきでないこと、そ 恐るべ Tönnies, の挨拶はこうであつた。二十年前には超經驗的思辨的支配の き崩壊からほぼ十年經た一九五四年十月かつてのマ in der soziologischen Forschung」(1949) *145 > M. Weber, A. Weber, Sombart, Simmel, L.v. 何よりも何が

る。 のつながり、 ず法律學者、 あつたが近時のドイツ學界ではディルタイに近づける意見が有力にマックス・ウェーバーを新カント學派と同一地平に置くのが通念で 來する 支える精神的なるものへの姿勢、人間が已れの内部にもつ暗い衝動 編者である Johannes Winckelmann なりつつある〈例えばマックス・ウェーバー學問論論文集第二版の に對する自身の世代の親近感により彩りつつ詳細に跡づけた。從來 おいて右のディルタイとマックス・ウェーバー相互の親近性を、彼等 Verstehen bei Dilthey und Max Weber」(1950) なる論文に を顧みつつ位置づけた。彼は更に「Das sozialwissenschaftliche ドイツ的傳統としての姿を現わしてきたその(解釋的方法の)歷史 思考に支配された後 Schleiermacher, Droysen に至つて初めて 解社會學)に根差すものであることを、 傳統がとりわけディルタイ 前においているものであること、吾々自身又人間であることを常に合的な方法としての「理解=解釋的」方法であり、「吾々は人間を限の ら彼等を護る「黄金の鍵」として迎えられ、ついで啓蒙の自然科學的 自覺していなければならぬ」という「態度」であつた。そしてこ 解し解釋する」という視角をもつ「文化社會學」と之に固有且つ適 |科學」にのみ仕えんとしたマックス・ウェーバーとディルタイ ストア哲學へ流入しそしてルネサンスのプロテスタント教會か では哲學者ディルタイに反し哲學者ではなく又たろうともせ Hermeneutik(解釋學)が神話學的源泉に發しキリスト 親近性はどこにあるのか。深い現實感覺、社會形成を 經濟學者、 社會學者として、特殊研究者として、只「專 (解釋學)とマックス・ウェー ギリシヤ語 Hermes に由 も叉同一見解を示して 0)

E 32

ある。 探求に新な可能性と路を開いた」ということであつた。 學の領域に移し、この領域に新たな道具を創造し爾來社會的現實の 領域にのみあつたようにみえる『理解の技術』をヴェーバーが社會 つぎ、 社會科學部門にいわば遠くから示した課題と目標をウェーバーが引 點においた」ことであり、その結びつき方は「ディルタイが個々の けるのは、「人間中心主義的視向であり恒に人間の人格を研究の中心兩著の共有するものではあつたが何ものにもまして、彼らを結びつ 歴史を規定する非合理的契機の洞察、 問題點に卽していえば「ディルタイ以前には女猷學的考察の 己の特殊領域について徹底的に考えぬいた」というもので 豐かな歴史的思考はいず 被らを結びつ思考はいずれも

比較するにより諸々の作用が析出され、 され得なか 的妥當知識はいかにして可能か」という問題解決の爲の方法と武器ルタイの課題は「かかる所與のものの地盤の上で歷史的世界の一般 認めつつ、 を生きた全體に關係づけることを無視した點に抽象派の根本誤謬を 概念を神秘的としてその實體化を拒否し、人間的なるもの、經驗的 的思辨的思考への聞いを起點とし、民族精神、民族心、有その始まりにおいて數學的自然科學的觀察樣式並びにロ 規則性が明白になりそこに豫測的知識の成立が可能となる點に を發見することであつた。その發見はあまりに幅廣い關心の故に果 なるものの尊重を主眼とし更に歴史學派が現實の深い感情にひたつ て抽象化の世界から逃避したことを責め、他方抽象化した部分内容 「理解」の自己目的ではあるが、多様性を理解し 歴史的現實をそのものからみることを主張し續けたディ つたが個別的多様性を概念的に整序するための比較的處 この作用連關の考察により 有機體等の つつ旦つ マン主義

> 論 合的因果という論理装置を伴いつつ人間の態度様式(社會的行爲)立し得ること、このようにして理想型概念構成が客觀的可能性と適 ディルタイ流に言えば生を生そのものから把えるのである。 によつて理解=解釋的方法は固有且つ適合的考察様式なのである。 つ叉觀察者たる晋々自身再びその舞臺での演技者でもあるという事 れて人間」(ディルタイ)が吾々の認識努力の正面舞臺に登場し、 態的性格の故に、「あの抽象的實體的本質者の灰色の織物はひき裂か 概念産物は認識「手段」であり歴史の生成と共にうつろうという動 の妥當な意味把握解釋に近づく手段とされつつ解決の步を進めたこ けられ、更にそこから可能な未來の狀況從つて態度決定の測定が成 値解釋は意味ある態度決定の準備的作業という意味で價値に關係づ 型的概念構成、 **うこの解釋學の原理的課題が、マックス・ウェーバーにより、** 知論的主閥性の絕えざる崩壞に對し歷史の確實性をつくり出すとい 成する中心點をめぐつてまとめられる」ことを注意している。認識 ……そこでその仕事が完全に現實化されるという理想的な場合を形 的産物は「型」を現わすものであること、そして「現象の多様性は とはあまりにも周知であるだろう。そしてこの理想型的概念構成の のを個々の事例からとり出す單なる一般化ではなくしてその概念 論理學、 の論理的機能を認め、更にそこに行 方法論の關連の下にとりあげロマン主義的恣意と不可 評價と價值關係の又評價と價值解釋の峻別、 れる概念構成は共通 更に價 理想 な II.

て人間はその全き人格性において社會科學的研究のすべての努力の ディルタイ= Wanstrat マックス・ウェーバーをつなぐこのようなドイツ的 は確認しつつ歴史的、 社會的本質とし

イツ社會學の思考狀況に關する

形成體、 **交點にあること、その相互に對する態度、絶えず變轉する諸制度、** ることを改めて確立した。 その生成、成立に共同する彼の行爲が自らの認識對象であ

= 認識批判としてのイデオロ (Theodor Geiger) Der homo Vitalis չ Der homo Intellectualis

理主義に路をあけ 論的に自省されつつある。『恩惟が存在に抱束されている』というマ デオロギー り幸福な時代の産 物とし て今 や「古く さくみ える」-社會學會創成期を支配したマックス・ウェーバー的プログラムがよ は論ずるまでもない。この異常な傳統は、先にあげた職前のドイツ (E. Fuchtfeldt)こそ現代ドイツ社會學の 直接的傳統であること をきめつけあう職士 となつて 對峙した。こ の「異常な 闘爭狀況」 者が抱くで あろう 理念追求の「狩人」たる を止 めて敵か味方か」 を根底から揺り動かすことになつた。そこでは人々は最早失々の論 基本概念として二十年代後半から三十年代にかけてドイツ社會學界 に至つたが、他方又「イデオロギー」概念へ高められ知識社會學の (Derivationen) という知識社會學的理論がイタリヤ・ファシズ ハイムの汎イデオロギー的命題は彼の意圖せざる結果として非合 はマッ れて知識社會學的概念である」價値からの自由」(Wertfrei-主義」(Pan-ideologismus)の一面性への警戒として理 という現代ドイツ社會學界の精神的雰圍氣下では「汎イ クス・ウェーバー -丁度 Paretoの「殘基」(Resiāuen)「派生」 自身において理解社會學に結實する Ļ ⋪

als Wirklichkeit, を經てドイツ社會學の「イデオロギー」概念に至るその歷史を顧み 派の Ideologen に始まりドイツ のマルクス・エンゲルスの唯物論 logie」(1951) はこのようなものであるが、前者は佛大革命期の啓蒙 feldt 8 | Zur heutigen Problemstellung der Wissensoziomer & [Ideologie und Wertgebung](1951) 冬 Egon Tucht-るもののみが社會學的に何ものかをみる」(H. Freyer: Soziologie 深く認識するチャンスを意味する……社會的に何ものかたろうとす への從屬化から、 つつそれのもつ相對主義的性格、精神の感覺、本能、社會經濟條件 的反省のうちに概念内容の妥當領域確定へと向つた。M. Horkhei-かにまみれ色褪せてしまつた「イデオロギー」概念の歴史的、論理 「理想型的概念構成」の熱心な主張者に轉じている(後記論文参照)。 せしめたが、この『Freyer でさえ、今では「價値からの自由」、 さに認識様式の社會被抱束性は一定の存在局面を特に純粹 つて社會學會の指導的地位についた Hans Freyer において ス支配の一 ムに利用されたように さて右の理論的反省は先ず第一に敵對する攻撃の武器として手あ 引用)として「主閥性の國民社會主義的崇拜」(Geiger) 九三三年、 1930 S. 113 u. S. 305……T. Geiger 論文よ 從來の幹部 Sombart, 「異常な闘爭狀況」が頂點に達したナ L. v. Wiese 等に代 に叉特に を出現

あとにふれる Geiger 論文に基本的に立脚す るとみら れるが 故に 後者は同じようにこの概念の歴史的起源を考察してはいるが今すぐ ようとする主意主義的性格とその故の論理的分析の未熟さの爲に、 ノザ的命題卽ち明確な理念の把握と滲透する現實認識のうちに脫し 世界は世界以外に標識を必要としないというスピ

ここに立ちいる事を避けたいと思う。

griffe der Ideologie」(1949) はその明晰性、 は經濟的進步の必須條件である」という主張を企業者イデオロギ 方はナンセンスであろう。何となればそこではすべては正しいイデ 識」に至るまでさまざまの審判者が登場するであろう。 ればそこでは「正しき階級 意識からナ チスの 正しき 種族・民族意 面にのみ存するので、 眞・僞、正・惡を判別する客閥的法延の存在するのは、現實認識の局 あらゆる眞の理論的內容なき純粹のイデオロギー」であること、及にある。そしてこの主張を推進せしめる論理的軸心は「價値判斷が を興える事により汎イデオロギー主義の危險を克服しようとする點論中に混入される理論外の契機を批判・摘發する概念としての機能 根本主張はイデオロギー概念の妥當領域を理論批判にのみ限定し理 において「勞働者が悪しきイデオロギーをもつている」が如き言い を超個人的主體に儲屬させんとする事は無意味であり神話である」 び「すべて精神活動なるものは諸々の個人のそれであるが故にそれ 分析した H. Geiger の論文「kritische Bemerkung zum Begerström(1939 歿)の「價值判斷發生」に關する理論に依りつつ との二つのテーゼにより組立てられている。本來思考の正・不正、 く戰後におけるこの方面の論文中出色のものの一つであろう。彼の ある「價値判斷」概念の論理講造をスウェーデンの哲學者 A. Hä-一見自明にみえるが故に立ちいつた分析なしに使用される傾きの 的進步の必須條件である」という主張を企業者イデオロギーーであり悪しきそれであり得ようから。然るに「企業者利潤 質存的な思考面には存しない。 その形成が各自の生活體驗の如何に依存する もし後者にあるとす 問題性において恐ら 從つてそこ

> 故に、 る。 値判斷發生理論から最後の點に反對しつつ自身の價値判斷構造論が 與えられた客體の特性中へ解釋し直され客觀化される事により生ず 契機としての社會構造の思考中への突出ということはあり得ずむし は認識批判の概念として機能し得る。したがつてイデオロギーの本のみ虚偽の思考としてのイデオロギーは成立し得るが故にこの概念 誤りを認識領域を越えたすべての精神活動にまでその範圍を擴大し 眞・僞についてその 虚僞性を 争い得るで あろう。 この客觀的現實 展開される。 正・不正のらち外にあり「無」である。以上の Hägerström 値主張は理論的立言ではあり得ない。對象に對してはそれは眞・僞、 故に、それは客體への諸々の個人の感情連闢にすぎないが故に、價る。然るに空間的・時間的現實體として價値なるものは存しないが ろ心的態度(Mentalität)の問題である。さて 質は「理論外の契機」が思考中にしのびこんでいる點にあるとされ た點に認め、 の認識上の立言を彼は理論的命題と呼び虚偽的思考としてのイデオ よれば價値表象は客體への評價する者の感情關係が空間的時間的に ロギー概念をそこに限定し、 と呼ぶなら客觀的現實についてのこの認識の現實との一致・不一致 然るにすべての思考は個々の人間のそれである以上そのような 例えば動物虐待について某氏が ここに一切の混亂の原因をみた。しかして理論局面に 上記の理由から汎イデオロギー主義の Hägerström 12

- 嫌惡感を覺える……第一次的評價行爲
- 「ペッあの虐待者め」とはき出した場合… : 吐露的評價の表
- 「私は動物虐待を嫌悪する」と言つた場合……反省的評價

現代ドイツ社會學の思考狀況に關するノー

「動物虐待は嫌悪さるものである」……價値判斷 が

ら思考を始める時、のつびきならぬ課題として照らし出されるもの 政治家、學者としてのマックス・ウェーバーの苦闘に象徴されているはウェーバー・マンハイム的傳統をうけついでいるがこの危険は、 的なイデオロギー源泉の自省により発かれんとしている。 デオロギー化の危険を、感情禁慾と自己コントロー である點にこの言葉がもつ一種の蔑視感が生ずる。 侵入=イデオロギーとして批判を觅れない。かくイデオロギーは第 するものとして置かれているのであり理論的敍述を志向しているの ように、Der homo Vitalis(生活者)、Der homo Intellectualis である。かかる感情關係の客觀化「價值判斷は理論外契機の思考への として反理論的現象であり、このように感情現象に感染された理論 (知識者)という二重容貌をもつ吾々人間に一切をひきつけそこか 次的感情關係の客觀化・理論化に依る眞ならざる、みせかけの理論 いるのに反し倒は虐待自體につ 虐待に對する彼の感情關係について即ち自身について言 いて「嫌悪」という特性が内在 最後にかかるイ ル、自身の潜勢 この點で

近代經濟理論と知識社會學

છ 「數學的編細工でなく人間の行爲、 Eisermann 行動が問題なのだ」

大するに至る。 するに至る。例えばかつて第六囘社會學會大會(1928)に哲學者以上にみたような幅廣い關心、活潑な意慾は常然思考の分野を擴

> に関連する經濟學との關係にふれてみたい。 屈折に手ざわりする思いにうたれるが、ここでは社會學に最も密接 文學上の豐富な文献を呈示しているのをみるとドイツ精神生活史の てもつ文化社會學の礎石として利用さるべき社會科學、美術、哲學、 zur Kultursoziologie」(1949) によつて この「理解」を方法とし Soziologentages, 1929. S. 235—238.)、この彼が今「Bausteine 普遍化に反對したが(Verhandlungen des sechsten Deutschen 科學の方法としての「理解」についての報告に對し道德的諸現象に として出席した Rothacker 方法は適用されることを主張して只一人この方法の は、その大會での Sombart の社會

kung über das Verhältnis zwischen ökonomischer Theorie の兩論文における問題點をまとめればこうである。 手をそめた。 解放に H. Sultan は「Gesellschaftliche Strukturwandlungen を要らざる課題となしている。この「宿命的誤り」からの經濟理論の る」という、かの宿命的誤りから經濟理論を護ることは社會學の證明 カニズムのように自足的、自立的機能連關として因果的に構成しう theorie」(1950) によつて、「經濟の理論はその對象を自然科學のメ る 現在旺盛な學問的生産力を社會學、社會哲學の分野で示しつつあ Ziegenfuß # Nationalökonomische Theorie」(1953) なる論文において sozic-ökonomischer Struktur」(1954) を發表した。 續いて之に刺戟を受け G. Eisermann は「Bemer-Wirtschaftssoziologie und Wirtschafts-

がそのモノグラフへの路を開けた。プログラムは①經濟理論に「君 先ず Sultan がこの「解放」のプログラムを公布し、Eisermann

營み方は 前の社會構造に依據し、その 思考 樣式(Denkstil) Myrdal やアメリカの制度學者達にすでにみられた 既に過去のものとなつた思考立場(Denkstandort)に屬すること けられその結果「近代理論」の活動様式のよつて立つ地盤はそれ以 である。この綱領の實踐は何より現代に支配的な「近代理論」に向 にとりあげ、 ツ的ならざる右の設問様式を みること、 營み方」を設問すること、 が摘發されたのである。知識社會學的分析によれば れ知識社會學の諸概念を使用することとして規定された。このプロ ラムはすでに無意識的に適用されていた、且つ又決して特殊ドイ そのように考えるのは何故であるか」即ち經濟理論の活動様式 Ħ ③そのために Mannheim であれ M. Scheler のであ Weise)、把握様式を、從つてその内實ではなく「理論の より鋭い武器(知識社會學)をそれに添えたものなの (2)それと社會構造、その轉換との關係を Sombart, Eucken, Keynes, 「近代理論」の は内容的には より自覺的

- (2) (1) 「模型においての思考」
- 「理論の道具的性格」

に經濟理論家が神の「座」に位置し人間の經濟と社會とを含めて世 えば ≫Ingenieur-und Maschinist≪(技師--機械師)の神の代り のでありかの理神論の「見えざる手」をもつ、M. Scheler 的に言 に示されている。こ のうち印 の「模型論」は古 典派のよ つた標語 Laissez faire, laissez passer, の後文「世界は自ずと動く」という豫定調和信仰に基づくも 「均衡定理と弾力性概念」 le monde va de lui-même

> 要であると主張して理論のもつイデオロギー性の問題を指摘した。 型であるのに、あの理神論の現實地盤たる社會構造のその後の質的 的不適合性を刻印し、誰が(質的……社會的勢力)、どれほどの多數 變化は言うまでもないとして近代理論にその活動様式の知識社會學 あるがともあれ右のようにその思考立場、思考様式の十八世紀中葉 つた。道具的性格の哲學的地盤は新カント派やプラグマティズムに 出現せしめ、 立場の構造的同一性を示したが現代ではこの同一性を「均衡定理」に 主義、連帶心理、對外政策上の balance of power 等に廣汎な思考 則」概念は現代の「模型」概念としてその亜神學的立場を薄めたので 期自由主義の「亜神學的思考立場」なのである。古典派の「自然法 界という機械が「自ずと廻轉する」よう設計したもので、 よりラディカルに示したのが の人(量的) ありあの見えざる手の豫定調和の理神論は自由貿易論、政治的自由 「完全競爭」という均衡定理は社會の調和 かかる近代理論の知識社會學的不適合性を豐富な文献を示しつつ がある一定の理論を擔い代表するかということこそ軍 この定理の動態的純化たる「彈力性」概念をもつに至 Eisermann で例えば「完全均衡」 所與の社會經濟の枠 まさに初

の行為、 て特に人間行動に密接に結びついた局面を對象とする景氣變動論、 は可能な限りの全體的數學化によつては調整されずしてむしろ人間 求と合致しているものだと言いきつている。この「現實不適合性」 定の社會學的集團のもつ利益狀況に顯著に對應するもので實踐的要 内にさまざまな狀態にある社會學集團の利害の調和を前提とし、 くてその理論體系は、社會的調和の現存することの宣言に關して 行動が問題なのだという事實を忘るべきでないこと、そし

イツ社會學の思考狀況に關するノー

看取していたことを跡づけ注意している。 shall や、その追隨者に反して 動を與件Aとして一括してしまう 間行動=社會學的局面を表示するものであると。 企業者の期待、 しまうこと、 このような點では、近代理論の父達 流動性選好、消費性向等の心理的概念はもともと人 金融論はもし右の事實を忘却し、各種の人間 Keynes は右の問題點をはつきり なら「眞空中の理論」に墮 例えば Keynes の Menger, Mar-して行

に對しているのではなく狀況に立ち向つている」(Sultan)のでああるを承認する事だと知識社會學は教える。何故なら「吾々は理論 る研究者の Persona(彼の知識社會 學的立場を含めて)のうちに **實への姿勢様式や現實からのその構成部分の選擇」がすでに觀察す** 經濟理論の理論的墮落、獨斷的ユートピヤからの解放の前提は「現

五, 社會學的人格概念

を即物的效果に代える」 「産業的社會の巨大組織は人間を機能に還元し人間の生命性 -Hans Freyer

の知識社會學的意義が存する。 多方面な關心は社會構成體の基礎單位としての人間内面への深々との要求を伴いつつ中央に位置していることに氣づかれたであろう。 した意識と對應しているのである。その點にこそ先にあげた第一囘 さの軸心として「人間」 人間學的社會學會議の第一テ 注意深い讀者は旣に、ドイツ社會學の現代的關心の幅廣さと活潑 -その人格」概念が人間行動、態度分析へ 從つてことに人格概念の社會學的意 [Person und Kollektivium]

> 味と意義とに少しく觸れておく義務がある。 して語らしめればそれは次の三條件より成る。 社會哲學者 Ziegenfuß に最も適切な規定 者をみ出す。 この點で私達は社會學 彼な

- (1) に積極的だという意味で自發的に活潑に在るという態度……本 私達がその中にあるを義務づける社會的生活連關内で價値的
- それ放起個人的目的が承認されていること
- 成されること 會的意味をもち之によつて業績(Leistung) とい う性格が形この目的の實現化に手助けになるときにのみ個人の行爲は社
- 成を主張した所以を十分理解出來る。 に代つて「人格と社會形成體」という概念裝置による研究對象の構 た報告者 ものである。從つて私達は冒頭にあげた學會で社會學部門を代表し り離され孤立化された「個人」(Individuum)の概念と區別される この三つのモメントにより構成される社會學的人格概念はそれ故切 W. E. Mühlmann が「個人と個人の集まり」(Summe)

足早に考察してこの「ノート」を閉じたい。 人格概念がかほどにまで强調され、重要な位置を有している意義を ではこのように社會的生活連關內部における積極的態度としての

情を喪失せしめ、 仕方についてのエトスを剝奪する。 巨大裝置のなかに人間を否應なく(まさに義務づける)卷き込んで 近代資本主義社會が産んだ現代社會經濟機構のメカニズムはその 反射と循環の流れのなかに人間の自己意識、 企業、 工場、官廳等總じて社會形成體構成の目的、 かかる特質の最も端的な時代的

生命性への、社會形成力たるエトスへの吾々人間の「内なる叫び」 マッ **情により倍加される。** 次的(sekundär)組織」のそれとして規定している-表現は東西世界の對立でもあろうが、右の狀況のもつ悲劇性はその ではあるまいか。 々しく吾々に蔽いかぶさつている-巨大裝置自體がその内部に新しい社會形成の生命力を創出する力を すぐさま脱ぎすてらるべきこの世の假の薄衣が鐵の衣として重クス・ウェーバーが洞察力あるまなざしでみつめていたような 現代産業社會のもつこの問題性を H. 社會學的「人格」概念の强い主張は、かつて -問題狀況に直面しての人間の Freyer は「il という事

中心主義的志向「第二に「新理想主義的性向」という二つの言葉をここに吾々は現代ドイツ社會學の思考狀況を總括し第一に「人間

裹扉に彫りつけてこの「ノート」を閉じる。 附記 (このノー トの 作成には 慶應義塾學事振興資金の援助を受

參照論文

- ۲ 4 Wiese, Schmollers Jahrb. 69 Jahrg. Die Deutsche Gesellschaft für Soziologie. -107 1949, 2 Heft
- વ Deltmold. Schmollers Jahrb. 69 Halbb. S. 787-742. Der Zehnte Deutsche Soziologentag Jahrg. 1949
- ĸ Ġ Specht, ferenz. Schmollers Jahrb. 70 Jahrg. 1950 Die Anthoropologisch-soziologische Kon-

現代ド イツ社會學の思考狀況に關するノ

1 Heft S. 87-98

- Ħ શ Specht, Der 12. Deutsche Soziologentag und die Anthoropologische-soziologische Konfer-Schmollers Jahrb. 75 Jahrg. 1955,
- Tuchtfeldt, senssoziologie, Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft, Zur heutigen Problemstellung der Wis-107 ਸੁਖ਼ 1951, Ņ 723-
- Ħ Winkmann, 녉 L. v. Wiese zum Soziologischen Forschung in unserer Zeit. ziologie für die Sozialwissenschaften. -24. Die Bedeutung der systematischen So 75 Geburtstage 1951, 'n; Ŋ
- Ä Hofmann, schaftliche Die -40. Beziehungslehre als sozialwissen-Forschungmethode. ebenda S.
- ä Wanstrat, Jahrg. 2 Halbb. 1949, S. 641logischen Forschung. Die hermeneutische Methode in der sozio-Schmollers -659. 69
- 'n Wanstrat, 70 Jahrg: 1950, 1 Halbb. S. 19-Dilthey und M. Die sozialwissenschaftliche Verstehen bei Weber. Schmollers Jahrb.
- T. Geiger, Kritische Bemerkung zum Begriff der Ideo

logie. in; Gegenwartsproblem der Soziologie, A. Vierkandt zum 80. Geburtstag 1949, S. 140—155.

- M. Horkheimer, Ideologie und Wertbeziehung: in; Soziologischen Forschung in unserer Zeit. S. 220—227.
- Ed. Sultan, Gesellschaftliche Strukturwandlungen und nationalökonomische Theorie. Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft, 109 Bd. 1953, S. 602—614.
- G. Eisermann, Bemerkung über das Verhältnis zwischen ökonomische Theorie und sozio-ökonomische Struktur. Zeitschrift für die gesamte Staatwissenschaft. 110 Bd. S. 458 –471.
- —471.
 W. Ziegenfuß, Wirtschaftssoziologie und Wirtschafttheorien. Schmollers Jahrb. 70 Jahrg. 1950,
 1 Halbb. S. 1—18.
- Freyer, Der Mensch und die gesellschaftliche Ordnung der Gegenwart. Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft. Bd. 110, 1954,
 S. 1—12.
- E. Rohthacker, Bausteine zur Kultursoziologie, in; Gegenwartsproblem der Soziologie, 1949, S

79—101.

Bibliographie der Sozialwissenschaften. herausgegebe von R. Schaeder in; Jahrbuch für Sozialwissenschaft, Bd. 1/1 1950.

宗門改帳より壬申戸籍への

―維新期の人口調査とその一例―

、維新期における人口調査

二、和歌山藩における人口調査(以上四十七卷十二號)

三、紀伊國牟婁郡尾鷺組概觀

四、幕末維新期尾鷲組人口統計資料の考察

五、結言

、紀伊國牟婁郡尾鷲組概觀

起伊國牟婁郡尾鷺組は、現在の三重縣尾鷲市内に含まれる管下十四ヵ村で構成されていた。中心となる尾鷲は、徳川時代には中井、四ヵ村で構成されていた。中心となる尾鷲は、徳川時代には中井、四ヵ村で構成されていた。中心となる尾鷲は、徳川時代には中井、四ヵ村で構成されていた。中心となる尾鷲は、徳川時代には中井、四ヵ村で構成されていた。中心となる尾鷲は、徳川時代には中井、四ヵ村で構成されていた。中心となる尾鷲は、徳川時代には中井、四ヵ村で構成されていた。中心となる尾鷲は、徳川時代には中井、四ヵ村で構成されていた。中心となる尾鷲は、徳川時代には中井、四ヵ村で構成されている。

肚) 拙稿「近世における漁村の移住と漁場の利用、支配の關係

について」(三田學會雜誌四十六卷七號所收)參照。

速

はない。 七區小三區戸籍總計」から求めた。 の宗門帳末尾の記載から、 しかし、 ある。 大曾根の三ヵ浦と、 よるものであり、 これらは後日に讔ることとし、本稿ではその周邊の、早田、 口を有して居り、その資料は厖大であり、且つ缺損が甚しいからで さて本稿において取り上げんとするのは、以上の尾鷲組すべてで 同年四月に行われた宗門改帳系統に属する最後の戸口調査に これらは前後の關係から、 中心となる尾鷺五ヵ村は、第一表に示す如く相當大なる人 ここで一應全村の戸口敷を表示して置こう。 五年の數字は同年の壬申戸籍による。 向井村の四ヵ村の資料につき考察を行いたい。 後者は戸長における總計「度會縣管轄第 綿密に行えば復原も可能であるが 明治三年の數 前者は各村 行野、

ば次の如くである。 尾鷺組村々明細帳によるのが簡便であろう。適宜拔割きをしてみれ尾鷺組村々明細帳によるのが簡便であろう。適宜拔割きをしてみれるてこの四ヵ村の様子を最も手近かに知り得るのは、明治二年の

四七 (六九七)